

俳人・阿波野青畝の句碑をめぐる

関谷 大陸

【目的】

大阪に多数存在する俳人・阿波野青畝（1899-1992）の句碑の調査を通して、2022年に没後30年を迎えた青畝の人物像を考える。

【内容】

俳人・阿波野青畝は1899年（明治32年）に奈良県高取町にて誕生、16歳で俳誌「ホトトギス」に出会ったことで俳句の世界に足を踏み入れた。その後、青畝は高浜虚子や原田浜人の薫陶を受け、1992年（平成4年）に93歳で亡くなるまで第一線の俳人として活躍した。山口誓子、高野素十、水原秋桜子とともに「ホトトギスの四S」と称されるほど優れた俳人であった青畝は、活動初期には故郷である奈良で活動したが、24歳で阿波野貞と結婚したのを機に大阪市西区に移住しており、虚子を大阪に招いての全国俳句大会開催、南御堂の戦後の芭蕉忌復活への協力、みどう俳壇やよみうり俳壇の選者、大阪府芸術賞の受賞など大阪との関わりが非常に深い人物である。

俳人として全国的に有名であった青畝は、1944年（昭和19年）に大和郡山城跡に句碑が建立されて以来、全国に句碑が多数建立されており、2023年2月時点で82基の句碑が確認できる。青畝が主宰した俳誌「かつらぎ」や青畝の出生地である奈良県高取町の観光協会など関係各所への問い合わせやフィールドワーク、文献調査により、大阪で現存が確認される青畝句碑は、寂光寺（東淀川区）、カトリック高槻教会（高槻市）、牧落八幡宮（箕面市）、長源寺（西成区）、住吉大社（住吉区）、藤次寺（天王寺区）、大阪カテドラル聖マリア大聖堂（中央区）、守口文化センター（守口市）、今宮戎神社（浪速区）、難波別院（中央区）、弘川寺（河南町）、松操寺（池田市）の12基であることが分かった。

【結果】

クリスチャンであった青畝の深い信仰心を示すカトリック高槻教会や大阪カテドラル聖マリア大聖堂の句碑、友人との親密な交流を示す寂光寺や松操寺の句碑、松尾芭蕉や西行ら俳句の先達への思慕の念がうかがえる南御堂や弘川寺の句碑などそれぞれの句碑に、青畝の人柄や建立に関わった人たちの思いが表れている。

全国的に存在する青畝の句碑であるが、まずは大阪の句碑をめぐるところから、青畝の人となりに触れることができるのではないだろうか。青畝という優れた俳人の再評価の機運が高まれば幸いである。

1. はじめに

大阪には句碑・歌碑・詩碑の類が多く存在する。松尾芭蕉や与謝野晶子を別格とすると、大阪ゆかりの俳人・阿波野青畝（1899-1992）の句碑の多さは特筆に値する。本研究は大阪の青畝句碑の現状を調査することで、青畝がどのような人物であったかを考察するものである。

2. 大阪の青畝句碑

長年の精力的な活動によって数多くの名句を生み出した青畝だが、青畝の人柄や彼の作品を愛する人々によって日本全国に句碑が建立されている。1944年（昭和19年）、大和郡山城跡に「十五万石の城下へ花の坂」の句碑が建立されたのを皮切りに各地に建立された句碑は2022年（令和4年）、青畝の故郷である高取町の青畝文学館に「国原や桑のしもとに春の月」の句碑が建てられたことで、82基となった。

そのうち、大阪に建立されたもので現存するのは以下の12基である。

場所	建立年	句
寂光寺（東淀川区）	1962年（昭和37年）	流燈の帯の崩れて海に乗る
カトリック高槻教会（高槻市）	1979年（昭和54年）	磔像の全身春の光あり
牧落八幡宮（箕面市）	1979年（昭和54年）	新緑の句碑も神慮の一つとす
長源寺（西成区）	1984年（昭和59年）	端居して濁世なかなかおもしろや
住吉大社（住吉区）	1986年（昭和61年）	松苗や高知る千木にまてのひむ
大阪カテドラル聖マリア大聖堂（中央区）	1988年（昭和63年）	天の虹仰ぎて右近ここにあり
藤次寺（天王寺区）	1988年（昭和63年）	動く大阪うごく大阪文化の日
今宮戎神社（浪速区）	1989年（平成元年）	陋巷を好ませたまひ本戎
守口文化センター（守口市）	1989年（平成元年）	しゃぼん玉にくるまる童子童女あり
弘川寺（河南町）	1990年（平成2年）	いくたびの春の思い出西行忌
南御堂（中央区）	1990年（平成2年）	翁忌に行かむ晴れても時雨れても
松操寺（池田市）	1992年（平成4年）	手すさひに尼のつくろふ垣根哉

※寂光寺には、1954年（昭和29年）に、青畝の「早乙女の笠預け行く君の堂」の句が刻まれた梵鐘が納められている。この梵鐘には他に高浜虚子、高浜年尾、高野素十、田村木国、中村若沙、後藤夜半らの句も刻まれており、その縁で同寺を俳人たちがしばしば訪れたという。

※福島区の料亭富竹には1979年（昭和54年）に建立された「二三言恋めくもよし紅葉酒」の句碑があったが、現在では京都の東福寺に移されている。

3. 句碑から見える青畝の人物像

句碑に刻まれた句や、建立に至った経緯を調べると、そこからは青畝の人物像や彼を愛した人々の思いが浮かび上がってくる。本節では、大阪の青畝句碑の中から、青畝を知ることがで

きるものをピックアップして紹介する。

3-1. クリスマンとしての信仰心

青畝はクリスマンであった亡き妻・秀の影響で1947年（昭和22年）、48歳の時にカトリック夙川教会にて洗礼を受け、アッシジの聖フランシスコという霊名を得た。青畝はキリスト教を題材とした数多くの秀句を生み出しており、信仰が青畝の句作に与えた影響は大きい。

句碑の建立が珍しい寺社仏閣と異なり、教会にはそのような文化は見られない。しかし、青畝はカトリック高槻教会、大阪カトリック聖マリア大聖堂の二教会に句碑が存在する。両教会はいずれもキリシタン大名・高山右近にかかわりが深い場所であり、特に青畝の卒寿を記念して建立された後者の句碑は「天の虹仰ぎて右近ここにあり」と、右近への思慕の念が率直に表されている。青畝には「信弱き我いかにせん右近の忌」という句もあり、信仰者としての大先達である右近に対しての尊敬がよく分かる。右近ゆかりの二教会に句碑が存在するということが自体から青畝の深い信仰心が読み取れるであろう。

なお、大阪カトリック聖マリア大聖堂の句碑の建立にあたっては、高浜虚子の孫で青畝と同じくクリスマンである稲畑汀子が賛助人として関わっており、青畝の親族、当時の大司教や神父たちも参加した盛大な除幕式で祝辞を述べている。

3-2. 先人たちへの敬意

松尾芭蕉は、1694年（元禄7年）に南御堂の門前にあった花屋仁左衛門の邸宅にて生涯を終えた。1932年（昭和7年）より南御堂にて営まれるようになった芭蕉忌は、1945年（昭和20年）に大阪大空襲によって中断したが、1958年（昭和33年）に再開されている。同年10月30日発行の「南御堂新聞」第5号によると、再開にあたっては東洋紡会長や関西経済連合会会長を歴任した関西経済界の大物・関桂三の声掛けで、高浜年尾・山口誓子・中村若沙・阿波野青畝らが発起人として参加したとされている。青畝と誓子は「南御堂新聞」のみどう俳壇選者も務めており、その縁から1990年（平成2年）に、青畝の「翁忌に行かむ晴れても時雨れても」、誓子の「金色の御堂に芭蕉忌を修す」の句碑が南御堂の庭園に建立されている。

青畝は1961年（昭和36年）、1962年（昭和37年）等に芭蕉旧跡を訪れる旅に出ており、俳聖・芭蕉に対しての敬意は一方ならぬものであったと思われる。関桂三の呼び掛けに応じ、芭蕉忌復興に協力したことからもそれが窺える。

青畝は「山家集」で知られる西行法師に関しての句も遺しており、弘川寺には「いくたびの春の思い出 西行忌」の句碑がある。青畝の西行についての句は別に「かわかわと松に鴉や西行忌」もあり、旅好きであった青畝が漂泊の歌人・西行に抱いていた思慕の念が読み取れる。

前項で触れた、キリシタン大名・高山右近へのクリスマン・青畝の思いとあわせて考えることで、青畝が自身の生きる道の先達に対して、非常に強い敬意を抱いていたことが分かる。

3-3. 樗野南陽との交流

樗野南陽（1887-1956）は、竹内栖鳳に師事した日本画家である。初期には京都画壇で活躍したが、1927年（昭和2年）に池田市に移住し、没するまで同地を拠点に創作活動を続けた。

青畝は南陽と深く交流しており、1943年（昭和18年）には朝鮮文学報国会の招請により共に渡航し、釜山、慶州、京城、金剛山、平壤などを訪れた記録も残されている。

大阪における青畝の最初の句碑は寂光寺に1962年（昭和37年）に建立された「流燈の帯の崩れて海に乗る」である。これは、青畝が定例的に行っていた流燈会を題材とした句であるが、青畝が流燈会を行い始めたきっかけは、『自選自解 阿波野青畝句集』によると、1956年（昭和31年）に没した南陽の冥福を祈るためであったという。

2023年2月現在、大阪における最新の青畝句碑は松操寺（池田市）の「手すさひに尼のつくろふ垣根哉」である。青畝は1942年（昭和17年）頃の南陽に誘われての初訪問以来、しばしば同寺にて句会を開いており、寺と青畝の長きにわたる交流から1992年（平成4年）、ついに句碑建立と相成った。8月の句碑開きには青畝本人も訪れたが、同年12月に青畝はこの世を去っており、大阪における最後の句碑開き出席となった。

青畝の大阪における最古、最新の句碑がいずれも樗野南陽に関連するものである。友人である南陽を弔うために流燈会を開いたことや、南陽が縁となって始まった松操寺との交流が最晩年まで何十年もの間継続したことから、青畝の「人とのつながり」を大切にする人柄が読み取れる。

4. 最後に

大阪に残る青畝句碑を読み解くと、青畝の温かい人柄が浮かび上がってくる。

青畝は、近代俳句史においてきわめて大きな功績を遺した偉人であり、彼の足跡をたどることは関西俳壇を知ることにもつながる。亡くなって忘れ去られる俳人も多い中、全国に数多の句碑が残り、没後30年経ってなお愛され続ける青畝の再評価が進むことが望まれる。

（主な参考文献）

「余野街道をゆく・上 池田市・絹延橋～細河小学校」『マチゴト豊中・池田ニュース』

http://machigoto.jp/news/detail/?art_id=2319（最終閲覧日 2023/1/10）

「樗野南陽」

<https://www.city.ikeda.osaka.jp/soshiki/kyoikuiinkai/rekishi/kanzousiryoku/ikedanokaiga/1415930126582.html>（最終閲覧日 2023/1/10）

阿波野青畝

1968『自選自解 阿波野青畝句集』白鳳社

川島由紀子

2019『阿波野青畝への旅』創風社出版